第６回　岳北地域の高校の将来像を考える協議会　次第

日時：令和元年９月２４日(火) 10：00～
場所：飯山市役所 ４階 全員協議会室

1　開　会

定刻になりましたので、第6回岳北地域の高校の将来像を考える協議会を開催します。
それでは次第に沿って進めさせていていただきます。

2　あいさつ

足立　会長）

お疲れさまです。今まで5回の協議会を行ってきたわけでありますが、課題が見えてきたなと思います。教育施設として下高井農林高校を将来に亘って地域に残していくという事、教育内容については、地域にとって地域産業に合う人材育成の為の教育をするという、２点を課題としてきたわけであります。

存続形態については、前回ご意見を頂戴いたしましたが、将来の時間的経過のクラス数も、判断する際に必要となってきますので、事務局でシミュレーションを作成したわけであります。その資料もご覧いただき、ご意見を頂きたいと思います。

また、下高井農林高校の同窓会の同窓会長から、この協議会の会長である私宛に、要望書をいただいております。内容としましては、３点ございまして、「この地域の子どもたちが、普通教育をはじめ、職業教育を学べる多様な機会の場の確保をお願いしたい」、「学校や地域におきまして、農林業の発展に尽力してきた下高井農林高校の学びが、地域と連携して、今後とも生かされるような体制となるよう検討していただきたい」、「岳北地域の産業の人材育成の為の、学びの場の提供を、子どもたちの勉学に負担にならない方法でできるようお願いしたい」ということでした。３点目について、どういうことか尋ねたところ、勉強するにあたって、生徒たちが学校間の移動をする等をできるだけ少ない形でお願いしたい、という趣旨でした。

こうした意見も参考にしながら進めていきたいと思いますので、本日もよろしくお願いいたします。

3　協　議

(1) 岳北地域高等学校の存続形態について

【資料】飯山市教育委員会教育部　常田部長より説明

足立　会長）

先程説明がありましたが、今まで県教委から高校再編の取り扱い等を踏まえると、こういう形が考えられるということであります。

ご質問等、ありますでしょうか。

日臺　副会長）

これまでの話し合いで色々な意見が出てきましたが、課題を解決するには、下高井農林高校だけ

でなく、飯山高校も含めて将来的にどういう風にしていくのか考えなければと思います。

まず、下高井農林高校については、このＡ案Ｂ案の他に、中山間地存立特定校という選択肢もあるわけですが、実際、条件的に特定校は難しいとなると、キャンパス化はやむを得ないのかなと思います。今説明を聞いた中で、前回の話も含めていくと、将来的に今の下高井農林高校の位置に学びの場を残していくには、地域キャンパスがいいのではと思うわけであります。皆さん方それぞれに考えがあるかと思いますので、色んなご意見をいただければと思います。いずれにしても、将来的に外の学区から出たり入ったりになるかと思いますが、2つの高校の魅力を高めていくにはどうすればいいか、これからもっと議論していくべきかなと思います。

富井 野沢温泉村村長）

私は Ａ 案しかないだろうと思います。理由としまして、現場の学校で先生方が子どもたちにどう指導しているのか、農業を目指しているわけではないが、飯山高校へ行く学力がないから、下高井農林高校へ行った方がいいよという指導が相当入っています。つまり、最初から農業を目指しているわけではないということです。それが大半だろうと私は思います。

この地域の子どもの数が減ってきている中で、全員の子どもたちが、学部はどうであれ、将来飯山高校の OB だよと言える体制をとっていかないと、小さな規模の学校の OB と分かれてしまったら、3年間で人生が決まる雰囲気になってしまうで、今年の甲子園もそうですが、飯山高校の甲子園出場が決まったら、OB が全員我々の高校だと言えるような、方向を目指していくべきではないかと思います。

子どもたちのことを考えると、全員が飯山高校の OB と言えるかどうか、それから、子どもたちの希望としてどうなのかを考えると、Ａ 案でいきながら可能な限り、魅力のある農林業の学科を維持していけるような体制をとれればと思います。

足立 会長）

確認よろしいですか。統合して新高校になった時に、学科ごとに募集しますよね。明らかに定員割れしてきた時に、引き続き募集はしてもいいのでしょうか。

県事務局）

倍率が0．5倍程度の志願者が少ない学科につきまして、残すかどうするのかというのは、大きな議論になりますので、検討することになるかと思います。

森重 栄村副村長（村長代理））

村としてどのようなスタンスでいけばいいのかを、事前に理事者と話し合いを重ねて、方向性を探ってきましたが、基本的な前提として、現状を残す考えであります。それぞれ長い伝統の中で教育をされてきたということもあり、それぞれの伝統を重んじ、独自性や真価をはかりながら、魅力ある高校づくりに取り組むのがよいということでございます。

栄村としましては、Ｂ 案を支持したいと思います。ただ、個人的に思うことは、本校や分校という名称は考えた方がいいのではと思います。本校がメイン、分校がサブというイメージを子どもたちが持ってしまい、特に分校の生徒については、本校ではなく分校ということで、今までの経験上、自尊感情を育てることが非常に難しいということがありましたので、名称については他の名前はないのかなと思います。

小林 木島平村教育長）

日臺木島平村村長とも話した中で、両校にとってどのような存続形態がいいのかと。結論からいう

と、地域キャンパス化を支持いたします。

教育課程について、現在それぞれ独自にやっていると思います。これが統合したとなると、教育課程の組み方が非常に難しくなるのではと考えているわけです。また、生徒の受け皿としても、現状の形がいいのではないかと。さらに、教員の配置ですが、教育の質の確保や、下高井農林高校の広大な圃場整備・管理等あるわけであります。この地域の、次世代を担う子どもたちの学びの拠点となると、地域キャンパス化がいいのではないかと。

地域として農林高校の魅力を発信したり、アピールしたりすることが大事かなと思います。

岩上 野沢温泉村教育長）

先程村長から話があったように、飯山高校にいけないから下高井農林高校に行くという、子どもたちの現状はあるかと思います。私としましては、同窓会から、生徒に負担をかけないようにと要望がありましたので、どんな形がいいのが正直悩んでおります。

石澤 栄村教育長）

子どもたちの学びの多様性は、非常に重要かなと思います。農林高校の専門性と独自性を維持できるのであれば、下高井農林高校を地域キャンパス化として残す方法が、現実的ではないかと思います。残したとしても、3年間で生徒数が60人を割れてしまうと募集停止になってしまうので、存続するための研究はこれからも必要かなと思っております。

足立 会長）

各高校の校長先生の意見を伺いたいと思います。

横澤 下高井農林高校校長）

今、ご意見をいただいた様な、学校の魅力や、生徒が面白いなと思ってもらえる様に発信していかなければと考えており、今年も色々取り組んでおります。将来的には、2つの学科をさらに魅力のあるものにしようと検討をしております。

県下の農業高校のほとんどは、就農を第一希望として入学してくる生徒が非常に少ないです。その反面、農業の学習を通じてでないと、学ぶことができないことがあり、色んな活動を通じて、社会としての資質を養うことも大きな役割だと思っております。多様な生徒のニーズに答えるためには、できるだけ小回りの利く、案がいいのではと思うところです。

林 飯山高校校長）

まだ統合して4年目ということで、統合後の課題はまだまだたくさんあるわけで、先へと考えが及ばないということがあります。本校も昨年、探究科が定員割れになって、再募集で上手くいったこともあり、魅力の発信は研究していかなければと思います。中学生に対して、本校でどんな勉強ができるか説明していかなければと思いますし、特に普通科については、どんな特長があるのかよく分かっていないと思うし、探究科についても、説明をしていこうと思っています。

形態については、それぞれメリットデメリットがあるので、どちらがいいとはまだ言えませんが、慎重に進めたいと思います。

加藤 長野県農業大学校副校長兼農学部長）

県の農業行政の立場から言いますと、計算すると毎年250名の新規就農者が必要ということで、就農者の確保へ全力をあげているところであります。我が校といたしましても、法人就農も含めて、生徒の60%が就農をしており、貢献できているのではと思います。高校の皆さんがどれだけ入学しているかといいますと、2学年あり、1学年の定員は40名になりますが、半数以上は推薦枠が占め

ております。推薦をいただいているのは、ほぼ農業高校の生徒さんということになります。その他20名の方については、農業高校の方も普通高校の方、県外からくる方もいらっしゃいます。
この地域に農林高校を残したいのは山々なのですが、一番は地域の事情ということになるかと思います。

中山 北信州森林組合代表理事組合長）
私は A 案の方が将来的にいいかなと思います。高校から直接就職する方は、少なくなってきているように思います。農林高校で基礎を学んで、大学へ進学できるよう指導をした方がいいのではと思います。時代に合った選択をして、地域に残していくには、統合して建物を残していくと。将来的には飯山高校一本化して、そこでしっかり学んでもらうのがいいのではと思います。

荻原 ながの農業協同組合みゆき地区担当副組合長）
例が違うかもしれませんが。JA でも統合等してきているわけですが、地域にあった内容になればいいのかなと思います。

足立 会長）
中学校の立場から、校長先生お願いします。

高橋 飯水中学校校長会長）
校長会で特別話をしてはいませんので、私個人の意見になるかと思いますが、発言させていただきます。
この地域で育った子どもたちに、選択肢を狭める再編の選択をするのは、不味いと思います。子どもたちがこの岳北地域での高校選択で、学校や科目に魅力がなければ、違うところへ意識を向けてしまうのかなと。横澤校長先生や林校長先生からも話がありました、現在の学科や中身を、どこにでもあるような教育ではなく、岳北地域で学べるならやっぱりこの学校だろうというようなものが、必要になってくるのかなと思います。
それから、子どもたちが減ってくることはやむを得ないと思いますが、逆に、例えば、今年で言えば飯山高校の野球部の甲子園出場や、吹奏楽部の東海大会出場など、活躍している姿から、他地域から入ってこられる窓口を考えることも大事かなと思います。

足立 会長）
各学校の PTA 会長さん、いかがでしょうか。

酒井 中高 PTA 連合会副会長）
正直、どちらの案がいいのか、私個人としては決められないなと思っています。どちらかといえば、親としては A 案、地域の住民としては B 案がいいのかなと。もっといいますと、B 案から A 案になるのもいいのではという思いもあります。親として、子どもの選択肢を減らさないことが一番大事だと思います。PTA の会議等で意見を求めますが、皆さんは正直分からないとのことで意見がでません。子どもたちにとっていい選択というのは何なのか、ということが分からないのが、正直なところだと思います。

富井 飯山高校 PTA 会長）
色々な会議に行く機会がありまして、佐久平の高校の先生と話す機会がありました。現状をお伝えして、どうすればいいと思うか伺ってみたのですが、先生も悩んでおりましたが、飯山高校の形にするのが良いのではというのがその先生の意見でした。飯山高校の校舎はできたばかりで綺麗である

ので、普通の授業は飯山高校の校舎で、実習等は下高井農林高校の校舎でやるのはどうかな、と私は思いました。

足立　会長）
　次に、農業関係者から意見を伺いたいと思います。

太田さん 飯山市農業関係者）
　自分の周りの農業の家を見ても、農林高校を卒業してそのまま農業をやることは少ないと思いますし、高校卒業後に農大や専門学校へ行く方が多いのではないかと思います。
　下高井農林高校へ行くと、色んな資格を取ることができ、卒業して就職しても戦力になるという話も聞いたことがあります。
　この地域で農業をやるにしても、雪が降ると仕事ができないデメリットがあって、きのこ栽培ぐらいしか1年通してできる仕事がなく、子どもたちに農業を進めることが自分でもできないので、農業科というよりは、専門的な資格を取ることができる専門学校のような位置づけの方が、子どもたちにとっていいのかなと思います。

日臺　副会長）
　皆さんの意見を伺いまして、双方の案でメリットデメリットあるわけですが、私はやはり地域キャンパス化かなと思います。
　統合して、下高井農林高校のキャンパスが、極端に言えばただの農場ということになれば、魅力を高めることは難しいと思います。魅力を高めていくには、独自性を持った高校として存在していないと、厳しいのではないかと。
　農林高校を出たからと言って現場で役立つわけではなく、勉強しなければならないとなれば、実際に現場で役立つ技術を取得したり、資格をとったりすることに力をいれるべきではないかと思います。

(2) 今後の両校に望まれる学びの姿について（意見交換）

足立　会長）
　続きまして、今後の両校に望まれる学びの姿について、ご意見を頂きたいと思います。先ほどは下高井農林高校についてたくさんご意見をいただきましたが、飯山高校についてもご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。

長瀬　飯山市教育長）
　私は、下高井農林高校は地域キャンパスとして残すべきだと。というのは、そこで勉強する生徒の負担が一番少ないということです。先ほど実習の時にどうするのかと話がありましたが、キャンパスを行き来するのは生徒にとってすごく負担になると思います。それはさておき、一番は、下高井農林高校がはっきり言わせていただくと、中学生にとってあまり魅力のない高校になりつつあるというのが、一番生徒が行かない理由だと思います。
　下高井農林高校の卒業生の7割が地元に残っている事実があり、色々な事情があるとは思いますが、地元で活路を見出していると思います。ですので、この地域の農業や産業を考えた場合に、農業＋αの部分も、新生農林高校に県教委で対応できる形をこの協議会でしっかり要望を出すことが、この地域の子どもたちの為になると思います。
　また、中学校サイドの進路指導のあり方が、新生農林高校の決め手になるかと思います。中学校

の進路選択の際に、下高井農林高校の素晴らしさや良さを中学校の先生方が自信を持って説明できる農林高校を作るべきだと思います。

飯山高校と一緒にするというのは、まず、専門科目の編成、教員の配置、他にも色んな課題がでてくるかと思います。また、少なくとも、農林高校を必要としている生徒もいるということを忘れてはいけないと思います。ですから、私はぜひ、地域キャンパスにして県にお金をかけていただき、施設を良くして先生方に頑張ってもらうことが本筋ではないかと思います。

小林　木島平村教育長）

例えば、統合の場合はキャンパスが違っていても、同じ教育課程で職員集団としても同じであるわけであります。しかし、地域キャンパスとなりますと、専門的に自分たちがどのように魅力のある教育課程を作り出そうかという意欲にも繋がるわけで、やはり一緒ではなく別の方が、より子どもたちにもよりいいものを作り出せるのではないかと思います。

富井　野沢温泉村村長）

これからの教育のあり方として、下高井農林高校を残す、残さないという問題ではなく、魅力があるかどうかという事は、確かにそうだと私も思います。今の段階での議論というのは、下高井農林高校を残すために飯山高校のクラスを削らなければいけない、逆にクラスを削れば両校とも少数校になってしまうと、この地域に住んでいる子どもたちが、両校を避ける傾向になると思います。

野沢温泉村の子どもたちのそうですが、もしこれ以上魅力がなくなってしまえば、長野市内の高校へ行ってしまいます。なので、残すのであれば、農林高校を別にする等ではなく、それぞれ特色のある学科として残せるのかどうかを、考えていかないといけないのではと思います。

足立　会長）

他にありますでしょうか。よろしいでしょうか。

本日はシミュレーションを提示させていただきまして、より議論が深まったかなと思います。課題としましては、農業を学べる施設をこの地域に残していくということ、地域産業にあった高校を目指すことが大きなポイントになるかと。今後の存続形態のみならず、教育内容の充実について今日は多く論議されたかと思いますが、今年中に県へ要望を提出しなければいけませんので、今日のご意見を踏まえつつ、この協議会としてどんな要望を出すかを整理させていただきたいと思います。次回の会議では、県への要望の原案について、ご協議いただければと思います。

それでは本日は閉会とさせていただきます。

4　その他

・次回開催日程について　１１月　６日（水）午前１１時～

5　閉　会